

フェンス新設後に試行した
《ドッグエリアのがわ》

2009年11月14日～12月13日(のべ4日間)

実施報告書

(抄録)

野川ドッグエリアの会 事務局

1：実施の経緯

2：実施準備

3：実施状況

①当日の流れと入場した犬の数

②苦情・意見

③トラブル

4：総括と今後の展望

①参加者の声

②スタッフの声

③今後の展望

●お問い合わせ先

eメール kenichiyoshida@nifty.com

fax. 03-3483-3284 (吉田)

1：実施の経緯

野川ドッグエリアの会(2006年3月25日に名称決定し正式発足)は、当初住民有志として2005年11月に署名活動を開始。世田谷区に、「成城4丁目29番地の野川緑地広場《周辺》地域に小規模なドッグラン《ドッグエリア》を整備してほしい」という要望を出した。2009年9月17日までに5回に分けて合計3025筆の熊本哲之区長宛の署名(要望書)を提出した。

一方、世田谷区は、2006年3月9日付で「世田谷区における人と飼い犬との共生の検討について」とする文書を当時の「都市整備部街づくり推進課/世田谷保健所生活保険課」連名で提示、「2006年4月1日以降は、全庁横断的な検討会を始める」(当時の五十嵐土木課長)という姿勢を示した。その後、区は住民意識調査を開始。2006年7月には、会の役員に対して、「条件付で小規模なドッグランの実施を容認という意見が多かった」(みどりのみず政策担当部、井伊和子部長)という調査の中間報告を署名提出の席で行った。

会と区は、その後定期的な会合を重ね、2007年4月からは毎月1回(のち、随時)、野川緑地広場内にある「(財)世田谷トラストまちづくり」ビジターセンター内の会議室を使って、《ドッグエリア》実現のための意見交換を重ねた。区の意向は、現時点では「仮設柵、フェンスなどにより仕切られた場所での、ドッグランの日時限定の試行を行うのが限界。いきなり、常設施設を作るのは難しい」というもの。対する会としては、あくまで常設の施設を要望したが、話し合いが平行線となつては意味がないので、まずは、社会実験として、《体験ドッグエリア》を行い、その実施状況や反響を見て、今後の方針を探るという点で一致した。

その結果、2007年10月6日～8日の3連休に午前、午後各2時間に限って、世田谷区喜多見9丁目29番地先、野川緑道横の広場約220㎡の敷地を使って実施することを決定。仮設柵、ネットなど、ハード面での資材は、砧公園管理事務所が中心になって公園緑地課施設係とともに準備することとなった。これが、第1回の「社会実験《体験ドッグエリアのがわ》」である。このときは、3日間にわたって、のべ203頭(飼い主の人数120名)の参加があった。

その、成功をもとに、第2回は2008年3月15日～16日の土日に実施。第1回は、午前と午後の時間帯ごとに、フェンスの移動を行ったり、その間に監視要員を配置したので、その労力を最小限にするため両日とも13時から17時までの4時間連続での開催にした。その中を、小型犬専用タイムと、フリータイムに、それぞれ分けた。また、第1回にない試みとして、プロのトレーナーによるしつけ教室を実施した。第2回は、犬の数のべ140頭、飼い主の人数100人(複数回利用を除く)の参加があった。また、第3回は2008年10月11日～13日の三連休に第2回と同様の時間帯で実施した。3日間での参加数合計は、のべ148頭(飼い主数の人数は132名)だった。第4回は2009年3月21日～22日に設定したが、天候悪化が予想されたので、21日のみの開催になった。21日の4時間の参加合計数は、

のべ65頭（飼い主の絶対数は60組）だった。第4回で、犬の数より飼い主の数が少ないのは、1日だけの開催だったため複数回の利用がなかったこと、2頭3頭の多頭連れの飼い主がひとりで参加した例が3件あったことなどである。ただし、第4回から人間の数は、人数ではなく組数で表示した。実際には、夫婦や家族で1頭の犬を連れてきて入場する場合も多く、犬65頭に対して、実際には概算で100名近い人数が利用したためである。

各回とも、会場でアンケートをとったが、多くの方が、この社会実験を楽しんでくれて、なおかつ、常設のドッグランを求める方が、利用者の9割を超えた。

相前後して、会は世田谷区との交渉を続けていた。2008年11月27日の世田谷区との話し合いでは、3月の実施後、2009年秋に向けて新たな設備の充実を要望する会の意見に対し、2009年度に入ったらフェンスを新設する方向で検討を進めることを区側が明言。2009年7月9日の話し合いで、これまで社会実験《体験ドッグエリアのがわ》を開催してきた場所に、開閉式の門扉とフェンスを設置し、通常は開放地に、ドッグエリア開催時は簡単な手間で囲まれた敷地に変更できるように計画された設計図が提示された。

この案に基づき、2009年10月から12月まで3カ月連続で毎月2日間「ドッグエリアのがわ」を実施する計画を立案。後援名義申請を行った。

工事が8月下旬に開始されると、地域住民から区に問い合わせが入り、設計変更をすることになったため9月末の工事完了が遅れることになった。そのため、新しい施設（フェンス）を利用して「ドッグエリアのがわ」を開始するのを11月からと変更した。

2：実施準備

会としては、これまでより簡便に開催できることと、頻繁に開催することもあり、その都度、参加者に書類を書いてもらうのではなく、年に1度登録すれば4月の狂犬病予防注射が済んで新たに更新するまでは有効な「利用者カード」を発行する方針を固めた。今回は年度途中の11月からではあるが、4月末まで有効とし、カードホルダー代も含めて300円の登録料を支払っていただく前提で、11月7日に砧総合支所住民集会所会議室（成城）で、翌8日に喜多見地区会館で、「事前登録」の手続きを行うことにした。

過去4回の「体験ドッグエリアのがわ」の参加者記録をもとに、約250通の事前登録案内を10月31日に発送。11月7日、8日の両日で、50頭分の事前登録があった。

現地そばの、小田急線高架下の世田谷区所有地の一角は、フェンスで囲んだ約10㎡の敷地が資材置き場として確保されている。だが、「社会実験」のときのグリーンの仮設フェンスが不要になったため、

三角コーンや台車など一部を除いて、大部分が区により回収された。当日現地受付のための事務用品などは、それを収納するための屋外用物置を区の厚意で資材置き場の中に設置していただいたので、そこに収めた。

あと、野川側の一部開口部分を遮断するポール6本とネットが新たに資材置き場に運び込まれた。

地域住民への事前広報としては、ポスターを現地に1ヶ所掲示したほか、約1500枚のチラシを会の役員らが喜多見、成城、狛江地区で配布。ほか、現地の野川対岸にあたる住宅地・成城4丁目の国分寺崖線下地域には、実施の1週間前にマンションを含めてほぼ700戸に全戸配布した。

3：実施状況

①当日の流れと入場した犬の数

11月14日(土)雨のち晴れ。午前中の雨が上がった13時すぎ。会の役員、協力者ら約5名が集合し、落ち葉を掃いたり、バケツやブラシなどの一部資材を出したりした。13時半を過ぎた時点で野川側開口部のポールとネットを設置。開始時刻の14時ちょうどに、開閉式フェンスのカギをはずして閉門。通り抜けできなくし、フェンスで囲まれた「ドッグエリア」が完成した。その後、事前登録した飼い主たちが徐々に会場に現れて、入場した。14時から15時は小型犬専用タイム、15時からフリータイムだった。17時に実施終了し、17時20分には片付けを完了した。

翌15日(日)は晴れ。現地登録の受け付け用机、文具などを出し、のぼりも立てて区公認の行事であることをアピールした。14時から15時は小型犬専用タイム、15時から16時はJKC公認トレーナーの鈴木潤(すずき・めぐみ)氏による「しつけとマナーアップ講座」を場内で開催。約20頭が受講した(無料)。16時からフリータイムで17時に実施終了し、17時20分には片付けを完了した。

初日の14日は悪天候が予想されていたので現地での利用者登録受付は行わなかったのだが、書類を用意してきた人がいたので、その人たちだけ受け付けた。12頭だった。15日の現地登録が31頭で、事前登録と合わせて合計93頭の登録があった。

実際の利用数は、14日が37頭、15日が50頭で、のべ87頭だった。利用登録より実際の利用数が下回ったのは、事前登録をしたけれど、この土日に利用しなかった人が一定数いたためである。

同一時間帯の最多利用は、11月15日の15時すこし前。25頭ぐらいの小型犬が入場していた。

準備と撤去は、以前の緑色の仮設フェンスに比べれば格段に楽になったが、のぼりも立てず、受付も置かずに開催した14日に比べ、現地受付のためにレジャーテーブルを出して、のぼりを2本立てたり、「通行止め」表示の看板を出したりした15日では、やはり手間が全く違った。

両日も、会の腕章をつけたスタッフが当番として5名以上立会った。世田谷区からは、15日に公園緑地課・横山係長が立ち会った。世田谷保健所からは、職員各1名が常に来場し、「うんちパック」や

資料を配布。犬を連れている通行人や参加者へのマナー向上の啓蒙活動を行った。

12月12日（土）くもり。13日（日）晴れ。この12月の両日も、11月と同じ時間帯で実施した。ただし現地での利用者受け付けは行わなかった（例外的に、書類と登録料を用意してきた3名には利用者カードを発行したので、登録した犬の数は累計96頭になった）。実際の利用数は12日が32頭、13日も32頭と偶然同じ数だった。前の月に比べて、冬本番の寒さであったことから、利用者が減少したと思われる。会場では、レジャーテーブルは出さなかったものの、のぼりを2本立てたり、「通行止め」表示の看板を出したりして、通行人にわかりやすい開催を心がけた。

13日に実施した「しつけとマナーアップ講座」は受講者が5頭と少なかったので、個別相談に切り替えた。

②苦情・意見

11月14日。午後3時過ぎに遊歩道をジョギングしていた中年男性から、勝手に犬を放し飼いしているのではないか、区の許可を取っているのならはっきり明示せよという趣旨の抗議があった。

11月15日は、14時半ごろ30代と思われる中肉中背の男性が、受付の前にやってきて、「騒音が心配だ。発生源が固定する」などの意見を述べていった。現場に立ち会った区の職員が、後を引き継いで、意見を聞いた。

12月13日午後2時半ごろ、初老の男性が「こうしたイベントもいいけれど、犬の飼い主が率先して、ノーリードの散歩をしている飼い主を注意してほしい」という意見を寄せた。もっともな意見だったので、「この場で知り合った飼い主同士が、互いにマナー向上の意識をもち、地域にその考えを広げていきます。もちろん、“マナー違反の人がいたら注意しましょう”ということも呼び掛けていきます」と回答して、納得してもらった。

③トラブル

場内での犬同士のトラブルは、11月と12月に1回ずつあった。

11月15日、16時過ぎ、中型犬と大型犬が吠えあつたので、ケンカを止めようと焦った中型犬の飼い主が間に手を出してしまった。そのため大型犬の歯が当たったのか、中型犬の飼い主が指先から出血してしまった。

12月13日、16時ごろ、11月とは別の大型犬が、やはり別の中型犬に噛みついた。

いずれの事例も、当事者間の話し合いなどで解決済みである。

しかし、こうしたトラブルが起きないように予防することは、スタッフの務めであるので、相性の悪

い犬同士が同時に入場したときには、飼い主にリードをつけるよう促すなどの予防策をとるよう、今後気をつけたい。

4：総括と今後の展望

①参加者の声

ほとんどの参加者が、会場を後にするときに「ありがとうございました」「お世話になりました」「楽しかった」といった言葉を、スタッフにかけて帰っていった。

②スタッフの声

役員・ボランティアの10数名のスタッフは、自分の飼い犬を連れてくるのも我慢して、当番の時間帯を担当した。それでも、ほかの犬が楽しそうに駆け回ったり、じゃれあったりしているのを見て、スタッフ同士「見ていると幸せな気持ちになる」「こうして、新しい飼い主さんと知り合いになると、地域の絆が広がる。いまは犬が多すぎて、散歩してすれ違っても挨拶すら交わさないから・・・」「犬がのびのびして、みなストレス解消になったようだ」と、全体的に肯定的な感想があがった。

③今後の展望

仮設柵による過去4回の「社会実験」のときと違って、準備と片づけは格段に楽になったが、頻繁に開催されることや、場所が固定化されることによる騒音被害を懸念する声が、過去4回で1度もなかった苦情や意見という形で表れてきた。今後は、地域の理解を得られるよう、十分配慮して広報・運営していく必要がある。